SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

コンクリート・ユートピア

2023年／韓国映画
配給：クロックワークス／130分

2024（令和6）年1月6日鑑賞　TOHOシネマズ西宮OS

Data　２０２４－４

監督・脚本：オム・テファ
出演：イ・ビョンホン／パク・ソジュン／パク・ボヨン／キム・ソニョン／パク・ジフ／キム・ドユン

みどころ

トマス・モアは原始共産制の“ユートピア”を描いたが、コンクリート・ユートピアとは一体ナニ？

お隣の超高層マンションを含むすべてのアパートが崩落したのに、なぜファングンアパートだけが生き残ったの？それが説明されないまま“マンションの憲法”を改正！住民たちは自己防衛の道を一直線に！その先鋭ぶりは「和を以て貴しとなす」日本人とは異なり、まさに韓国流だが、さてその展開は？

本作の問題提起や良し！しかしラストの大襲撃は一体ナニ？また、結末に見る“絶望後の希望”の姿は、あまりにもこじつけでは・・・？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

▪□■韓国発のパニックスリラーが能登半島地震の今、上陸！■□▪

映画にはディザスター映画もしくはパニック映画という範疇がある。その古典的代表は名作『ポセイドン・アドベンチャー』(72年）だが、『グエムル　漢江の怪物』(06年）（『シネマ11』220頁）や『ザ・タワー　超高層ビル大火災』(12年）（『シネマ31』169頁）等を観れば、韓国発のこれらは既にハリウッド超え？それを近時実感したのは、『白頭山大噴火』(19年）（『シネマ49』326頁)、『新　感染半島　ファイナル・ステージ』(20年）（『シネマ48』236頁)、『非常宣言』(22年）（『シネマ52』280頁）等だが、本作はそれに続く韓国発のディザスター映画で、アカデミー賞国際長編映画賞の韓国代表に選出されたものだ。

チラシには、「世界が震撼　衝撃のパニックスリラー 日本上陸」、「狂気が目覚める」の見出しが躍り、「世界を襲った大災害　唯一残ったマンション　生存者たちの争いがはじまる――」と紹介されている。本作は原題も邦題も『コンクリート・ユートピア』だが、理想的な原始共産制の社会を主張したトマス・モアの『ユートピア』とは正反対の、パニッ

クスリラーだ。しかも、日本では「和を以て貴しとなす」風潮が強いが、何かと自己主張の強い韓国では、パニックが高じてくると・・・？

折しも、2024 年元日の夕方 4 時 10 分に発生した能登半島地震は津波を含む大惨事となったが、本作冒頭に映る想像を絶するソウルの風景は？

■□■設定に難あり（1）なぜファングンアパートだけ残った？■□■

本作の大前提は、世界各地で起こった地盤隆起による大災害によって一瞬にして壊滅したソウルで、唯一ファングンアパートのみが崩落を免れたということ。しかし、そもそも、なぜファングンアパートだけが崩落を免れたの？

韓国映画はハリウッドを超えるド派手な演出が好きだから、私は本作冒頭にそれを期待したが、残念ながら本作冒頭のシーンはかなり地味だ。また、中流レベルのファングンアパートのすぐ近くには、超高層の高級アパート“ドリームパレス”が建っていたのに、ドリームパレスは崩落し、ファングンアパートのみが崩落を免れたのは一体なぜ？そのことの説明が全くないのが、都市問題をライフワークにしている弁護士の私には大いに不満だ。

本作のパンフレットには、佐藤結氏（映画ライター）のコラム「韓国を象徴する“アパート”とそこに住む人々」があり、そこでは韓国のマンション事情についての詳しい解説がある。また、松永昴史氏（ディレクター／CG デザイナー）のコラム「ゆらぐリアリティの境界」では、VFX（視覚効果）のクオリティについての詳しい解説がある。しかし、それを読んでも、私にはなぜドリームパレスその他の高級マンションがすべて崩落し、ファングンアパートだけが生き残ったのかが判然としない。したがって、その点の本作の設定にはムリがあると言わざるを得ない。

■□■設定に難あり（2）震災後の生存は？ラストの大襲撃は?■□■

1 月 1 日に起きた震度 7 超の能登半島地震後、1 月 7 日付新聞の朝刊は「発生 124 時間後に 90 代女性が救出された」ことを報じているが、これは、1 月 2 日に羽田空港で起きた、日本航空 516 便と海上保安庁の航空機との衝突事故で、日航機の乗客・乗員全員 379 人が脱出できたことと同じような“奇跡”だ。なぜなら、一般的に、震災後 72 時間が行方不明者の生死を分ける分岐点とされているからだ。

本作は韓国発のパニック映画だが、江戸木純氏（映画評論家）の「人間の弱さや愚かさ、醜さを息苦しいほど徹底的に描くことで 人間ドラマとしての完成度を目指した近未来パニック・スペクタクル」と題したコラムで解説しているとおり、ド派手な演出よりも、人間ドラマに重点を置いている。本作には、大きく分けて 3 つの物語がある。その第 1 はファングンアパートの住民代表に選ばれた 902 号室のヨンタク（イ・ビョンホン）を中心に、住民以外の者を追い出す決断を下す物語。第 2 は、権勢を振るう中で少しずつヨンタクの狂気が見えてくる中、防犯隊長に指名された 602 号室のミンソン（パク・ソジュン）や、その妻ミョンファ（パク・ボヨン）を含む住民全員が翻弄されていく物語だ。そこでは、なぜヨンタクが 902 号室の住民になったのかについての“あっと驚く秘密”が明かされて

いくのが最大のポイントで、そのストーリーはよくできている。そして、本作の第 3 のストーリーになるのは、ヨンタクと同じように、いや、ヨンタク以上に権勢を振るうファングンアパートそのものに対して、ファングンアパートから追い出されてしまった人々や、崩壊した世界の中で生き残った人々が、反旗を翻してファングンアパートを襲ってくる物語だ。しかし、これってかなりおかしい（現実離れしている）のでは？だって、食べるものも飲むものもないままファングンアパートから追い出された人々は、震災後 72 時間経過すれば、1 人また 1 人と死んでいってしまうのでは？

それなのに、本作最後に見るファングンアパートを襲う多くの人々のパワーは一体ナニ？どこにそんな力が残っていたの？

■□■設定に難あり（3）ラストはかなりのこじつけ？■□■

ソウルで唯一崩落を免れたファングンアパートに、大量の被災者が押し寄せたのは当然だ。しかし、救助隊が来る見込みもないまま、食料も水も残りはわずか！そこでは不法侵入や殺傷、放火までも！そんな状況下、マンションの住民たちが、住民のためのルールを作りユートピアを築き上げようと考えたのはある意味当然だ。土地の所有権に対するマンションの区分所有権を基本とした「マンション法」は昭和 37 年に制定されたが、区分所有権の対象たる専用部分と共用部分からなるマンションは「管理が命」と言われている。そして、その根幹は、マンション管理組合と管理規約だ。

ファングンアパートのそれがどうなっているのかは知らないが、大災害直後に、207 号室の住人で婦人会会長のグメ（キム・ソニョン）が生き残るための主導者選びの必要性を訴え、その代表者として 902 号室のヨンタクが推薦されたことによって、ファングンアパートの新しい憲法とも言うべきルールが確立した。その 3 ヶ条が、①マンションは住民のもの　住民だけが住むことができる。②住民は義務を果たし　その貢献度に応じて配給する。③マンションで行われるすべてのことは　住民の民主的な合意によるものであり　これに従わなければマンションで暮らすことはできない、だったが、その効用は？

本作では、前記第 1、第 2 の物語でその面白い展開が描かれるが、そのストーリー展開の中では結局ヨンタクやミンソンの人間性の限界とも言うべきものがあぶり出されてくることになる。それに対して、ミンソンの妻ミョンファは一見、いつも一歩引いた優柔不断のような立場だが、人間性だけはしっかりしていたらしい。したがって（すると？）、そんな理性的な人間が、あんな邪鬼のような人間の集団の中で共に生きていけないのは当然だ。ファングンアパートがかつて追い出した避難民たちの襲撃に遭い、ヨンタクもミンソンも殺されてしまう中、ミョンファだけは一人逃げ出すことができたが、その行き先は？そんなものはどこにもないはずだ。ところが、アレレ、アレレ、本作ラストは？

もちろん、こんな結末を用意すれば、「人間も捨てたものじゃない」という結末にすることはできるが、こりゃかなりこじつけなのでは・・・。

2024（令和 6）年 1 月 10 日記